

南伊豆を知ろう会スピンオフ企画『伊浜のむかし その3』

伊浜と江戸 —薪取引をめぐる—

高橋 喜子

はじめに

江戸時代、伊豆は江戸で消費される薪の主な供給地の一つであった。伊豆半島内の村落の大多数の村で江戸向けの薪の生産が行われていたとみられている¹。本報告では、現在調査中の『南伊豆町伊浜肥田家文書』のうち、「薪仕切」と「船積帳」に注目して、伊浜と江戸の薪取引の一端を明らかにしたい。

1、「薪仕切」からわかる薪取引の実態

○薪仕切りとは？

薪についての仕切状。→薪の売買に関する取引明細。

*仕切状

売主が商品の品質、数量、番号、代価など仕切金の明細を記載して貨物に添えて買主に送る書状（『日本国語大辞典』）。

○史料紹介

南伊豆町伊浜肥田家文書 9-19-21 「両替五拾式匁割薪仕切」

〔寛政9年（1797）閏7月22日付 山際与右衛門→肥田五郎右衛門宛

◆山際与右衛門（屋号 川喜田屋）

江戸 鉄炮洲（てっぽうず） 本湊町（ほんみなとちょう） 現在の東京都中央区湊

『諸問屋名前帳』〔嘉永4年（1851）〕によれば、「竹木炭薪問屋」を営んでいる。

→『肥田家文書』の中で頻繁に登場する人物の一人。

¹金子浩之「近世伊豆国廻船と都市江戸の構築」（『立正史学』第102号、2007年11月）、同「伊豆沿岸の村落と海運—塩・鹿・薪・炭・魚の商品流通の視点から—」（『伊豆歴史文化研究』第2号、2003年）

◆薪の内訳

- 一、伊浜三ヶ三千四拾束 代金四両壹歩ト 壹匁六分五厘
- 一、同姥メ千七百四拾束 代金三両壹歩ト 拾壹匁九分五厘
- 一、同柵千五百束 代金貳両三歩ト 七匁
- 一、同木貳千四百四拾束 代金四両貳歩ト 五匁四分

伊浜三ヶ → ?

姥目 → 姥目櫨 (うばめがし) ブナ科の常緑小高木

柵 → くぬぎ ブナ科の落葉高木

木数×8720束 代金 15両1歩也

(諸経費) 金1両1歩ト9匁9分5厘

差引 13両3歩ト3匁5厘 (此錢 183文)

◆資料からわかること

- ・江戸鉄炮洲本湊町の商人である山際与右衛門を介して薪を売っている。
- ・薪の売上のうち必要経費を差し引いた分が、仕切金として山際与右衛門から観音丸 (肥田五郎右衛門所有) の船頭である武助に渡され、肥田五郎右衛門へ届けられる。

○薪の売り上げ代金 15両はどれくらいの価値？

◆現在の貨幣に換算 (金1両の価値を計算)

例) そば

江戸時代中期～後期 そば 16文 ⇔ 現代 そば 300円

寛政9年 金1両 銀 60.15～62.25匁 錢 6.080～6.404貫文 (『日本史総覧』より)

仮に金1両=錢 6400文とすると、

$6400 \text{ 文} \div 16 \text{ 文} = 400 \text{ 杯}$ $300 \text{ 円} \times 400 \text{ 杯} = 120000 \text{ 円}$ → **金1両=約 12万円**

※上記はあくまで参考値。金1両は米を基準にすると約6万円、大工の賃金を基準にすると約34万円になる。何を基準に換算するかにより金1両の価値は異なる。

(参考: 日本銀行金融研究所貨幣博物館ホームページ <https://www.imes.boj.or.jp/cm/> → お金の歴史に関する FAQ → 江戸時代の一両の現在価値はどのくらいですか?)

◎薪の売上 $120000 \text{ 円} \times 15 = 1800000 \text{ 円}$ → **15両=約 180万円**

◆江戸時代における1両の価値 (江戸時代後期)

手代の年収 金2両～3両

下女の年収 金1両2分

(参考: 小野武雄編著『江戸物価事典』展望社、1982年)

2、船積帳にみる薪生産の規模

○船積帳とは？

船に何をどれだけ積載したかを記した帳面。

○史料紹介

南伊豆町伊浜肥田家文書 9-38-1「船積帳」（寛政9年（1797）巳閏7月）

→前述した「両替五拾式匁割薪仕切」（9-19-21）と同じ時期の「船積帳」。

◆資料からわかること

- ・伊浜村の村民がそれぞれ薪を生産、村全体で大量の薪を生産していた。
- ・伊浜村で生産した薪を名主である肥田五郎右衛門が取りまとめ、廻船を用いて江戸へ輸送し、薪を売っていた。

おわりに

～資料調査を通して明らかになってきたこと～

- ・伊浜村全体で大量の薪を生産、廻船を用いて江戸へ輸送し、薪を売っていた。
→伊浜村において薪は極めて重要な収入源。
- ・薪取引は主に江戸鉄炮洲本湊町の商人を介して行っていた。なお、薪取引のほか、必要物資の購入（米、大豆、船道具等）も本湊町の商人を通して行っている場合が多い。薪や物資の売買に関しては、江戸の商人との取引がほとんどで、他の地域との取引はあまりみられない。
→伊浜村は江戸市場との関わり深い。

伊豆半島の村落では、大多数の村で薪生産が行われていたことは先行研究で述べられている通りだが、本資料群は伊浜村における薪生産や取引の実態、江戸市場との関わりが具体的にわかるという点で非常に貴重。